６　次の文章を読んで問いに答えよ。 　　 〈東北大〉二〇二三年度出題

　（ア）禅意を得たりと言ふ者あり。「いかにして得ひし」と問へば、「がこの身はのものにて、といふものはなし。我なければもなし。これを、かののとも言ひおき給ひしなり」と、高く心得て言ひてけり。「いかにしてその所を得給ひしか」と言へば、「思ひ思ひてつひに得しなり」と言ふ。聞きたる人、いと笑ひて、「さまざまひじりも説きおかれけれど、かかる所得てし人は、今の世にあるべしとも思ほえぬばかりまれなるを、いまだそのことごとも知り給はで、いかで得給ふべき」と言へば、腹立ちて、「（イ）知らざらん人はいかに言ふとも、我こそ得しものを、などて君はしか言ふ。我が得ざることを知り給はば、言ひ述べ給へ」と、声ふるはして言ふにぞ、「それ見給へ。怒りをもいまだ捨て得ずして、この身を捨てしとのたまふか。ことに色と酒とにふけり給ふと聞きぬ。それだに勝ち給はで、我が身に勝ち給はんとや。よし勝ち得しとても、忘るてふことは、いときことなめりかし。得しと思ふもの、いかで得ん。君はもののふなれば、弓射ることもて言はん。（ウ）よく引きてよく放つがに、弓の道はなし。かくすればよく当たるを知りても、さはでぬはいかにぞや。勝ち負け争ふ時、人多く当てぬる折なんどは、ただそれに勝たまほしく思ふぞかし。また早く放つ弓のもあり。放し得難き病もあり。いづれも心の外なるものぞかし。またのゆるみて我が耳を打てば、いとどりに懲りて、またや耳打たんかと思ふぞかし。耳を捨つることもえせず、遅く放ち、早く放つことだに心にまかせず、人に負くるのしさをもいまだ捨て得ずして、いかでこの身を忘れ給はん。とにかく今は身に行ふことは積もらで、⑴口のみ高くなり行きぬ。あるやんごとなき人ありけり。の道を得てしとて、みづから世にならびなしとのみ、つねに言ひ給ひてけり。ある日、に居給ふ時、末のの障子を開き、り出でたるを見れば、大きなるのになりて、君を目がけてとびかかるを、『いで心得たり』とて、刀抜きて切らんとすれば、跳り越え、あるは伏し、左へ避け、右へ走りなどして、いかにも打ち得ず。とやかくするうち、すらすらと走り寄りて、その刀を取りてければ、口惜しさかぎりなく、いかにせんとあせり給へば、かの男、畳にひれ伏してけり。よく見給へば、の臣下なり。その者の言ふ、『君は剣の道、よくは心得給へども、いまだもぬけし位にも至り給はず。さるゆゑに、みづからうて得てしとのみ思ひ給ふ。まことに得し者は、かよきと思ふべき。さる御心にてましまさば、いかなるあやまちかし給はん。臣は剣の道、さして習ひしにはあらねど、死をきはめてすれば、臣をだに打ち給ふこともなり難かりしぞかし。（エ）これをよくよく思ひ給はば、御身のあやまちもあらじ』と、涙こぼいて言ひしかば、君もことに感じ給ひて、我が⑵むげにつたなかりしことをさとり給ひしとぞ。よくこれらのことを聞き給ひて、さとりとやらんの道はやめ給へ」とか言ひしとかや。

（松平定信『花月草紙』による）

（注）　○ひじり―聖人。

　　　　○もののふ―武人。武士。

　　　　○さは出で来ぬは―そうはできないのは。

　　　　○書屋―書物を置いて、読書、勉学等を行う家屋や部屋。

　　　　○外衛の臣下―主君に側近としてではなく仕えている家臣。

　　　　○もぬけし位―抜きん出てすぐれた境地。

問１　傍線の箇所⑴「口のみ高くなり行きぬ」、⑵「むげにつたなかりしこと」の意味を文脈に即して答えよ。

問２　傍線の箇所(ア)「禅意を得たり」とは、どのような境地のことを言っているのか。本文の内容に即して三十字以内で説明せよ。

問３　傍線の箇所(イ)「知らざらん人はいかに言ふとも、我こそ得しものを、などて君はしか言ふ」を、意味が通じるように適宜言葉を補って口語訳せよ。

問４　傍線の箇所(ウ)に「よく引きてよく放つが外に、弓の道はなし」とあるが、こうした「弓の道」の妨げとなることとして何が挙げられているか。本文の内容に即して六十字以内で答えよ。

◎問５　傍線の箇所(エ)「これ」は、どのようなことを指しているのか。本文の内容に即して六十字以内で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　⑴＝言うことばかり偉そうになっていった

　　　⑵＝ひどく愚かだったこと

問２　Ａ自身は天地のものであり、Ｂ我というものも敵もないと思える境地。（30字）

それぞれ同内容可。

Ａ＝５／Ｂ＝５

問３　Ａ禅意のことをわかっていない人が、どれほど言っても仕方がない。Ｂまさに私が禅意を得たというのに、Ｃどうしてあなたは私が禅意を得ているはずがないなどと言うのか。

Ａ＝３〔「知らざらん」の目的語が具体的に書かれていなければ減点２。「いかに言ふとも」の訳は「どのように言ったとしても」なども可。〕

Ｂ＝３〔接続助詞「ものを」の用法として、逆接の意味が訳出されていなければ減点２。〕

Ｃ＝４〔「しか」の指示内容が書かれていなければ減点２。〕

問４　Ａ相手に勝ちたいと思う心や負ける悔しさ、Ｂ矢を早く放つ癖や遅く放つ癖、弓の弦でＣ体を傷つける恐怖心や雑念を捨てられないこと。（59字）

それぞれ同内容可。

Ａ＝４／Ｂ＝３／Ｃ＝３

問５　Ａ我が身をもって示したように主君に捨て身の相手を倒せる技量はなく、Ｂ優れた者は自分こそが得たと慢心することはないということ。（60字）

Ａ＝４〔家臣の行動と主君の未熟さが説明できていればよい。〕

Ｂ＝６〔家臣の訴えが説明できていればよい。〕

【現代語訳】

　禅意を得たと言う者がいる。「どうやって得なさったのか」と問うと、「私のこの身は天地のものであって、自分というものはない。自分というものがないので敵もない。これを、あの（孟子は）浩然の気とも言い残しなさったのだ」と、とても自慢げに言った。「どうやってその心境を得なさったのか」と言うと、「考えに考えてついに得たのだ」と言う。聞いていた人は、たいそう笑って、「いろいろな聖人も説き残されたことだが、このような境地を心得た人は、現在の世にあるだろうと思えないくらい珍しいのに、いまだにそのこともおわかりにならないで、どうやって得なさることができたのか」と言うと、（禅意を得たと言う者は）腹を立てて、「問３（禅意のことを）わかっていない人がどれほど言っても仕方がない。まさに私が（禅意を）得たというのに、どうしてあなたはそのように（＝私が禅意を得ているはずがないなどと）言うのか。私が得ていないことをご存じならば、おっしゃってください」と、声を震わせて言い、「それご覧あれ。怒りもまだ捨てることができないで、この身を捨てたとおっしゃるのか。特に色欲と酒にふけりなさっていると聞いた。それ（らの誘惑に）すらお勝ちにならないで、わが身にお勝ちになったと言うのか。万一勝ち得たとしても、忘れるということは、たいへん難しいことであるようだよ。得たと思うものは、どうやって得たのか、いや得ていないだろう。君は武士であるから、弓を射ることを例にして言おう。よく引いてよく放つことのほかに、弓の道はない。こうすればよく当たることを知っても、そうはできないのはどうしてだろうか。勝ち負けを争うとき、他人が多く当てたときなどは、ひたすらそれに勝ちたいと思うものだよ。また矢を早く放ってしまう癖もある。遅く放つ癖もある。両方とも心の外のことだよ。また弓の弦がゆるんで自分の耳を打つと、いっそう懲りに懲って、またもや耳を打つのではないかと思うのだよ。耳のことを捨てることもできず、（矢を）遅く放ち、早く放つことですら心のままにならず、他人に負ける悔しさをいまだに捨てることができないで、どうやってこの身をお忘れになろうか。とにかく今は実際に行う経験が積み重ならず、問１⑴言うことばかり偉そうになっていった。ある高貴な方がいた。剣の道を極めたといって、自分で世の中に並ぶ者がないとばかり、常におっしゃっていた。ある日、書斎にいらっしゃった時、端の部屋の障子を開き、躍り出たのを見ると、大きな男で裸になって、主君を目がけて飛びかかるのを、「さあ心得た」と言って、刀を抜いて切ろうとすると、（男は）躍り越え、あるいは伏し、左へ避け、右へ走りなどして、どうしても討てない。そうこうするうち、（男が）たやすく走り寄って、その刀を取ってしまったので、口惜しさは限りなく、どうしようと焦りなさっていると、その男は、畳にひれ伏してしまった。よくご覧になると、側近ではない家臣である。その者が言うには、『主君は剣の道を、よくお心得になるが、いまだに抜きん出てすぐれた境地には至りなさっていない。そのために、自ら自負して剣の道を得たとだけお思いになっている。本当に（剣の道を）得た者は、誰が（自分のことを）すぐれていると思うだろうか（、いや思わない）。そのようなお心でいらっしゃると、どのような過ちをなさるだろうか。私は剣の道を、さほど習ったものではないが、死を覚悟してすれば、私をすら討ち果たしなさることも難しかったのだよ。このことをよくよくお考えになれば、ご自身の過ちもないだろう』と、涙をこぼして言ったので、主君も非常にお感じになって、自分が問１⑵ひどく愚かだったことを悟りなさったという。よくこれらのことをお聞きになって、悟りとやらの道はおやめなさい」とか言ったとか（いうことだ）。